KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY
Institute of Disaster Area Revitalization, Regrowth and Governance

関西学院大学災害復興制度研究所ニュースレター

FUKKOU

Vol.52

KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

○巻頭言
どうすれば貧者の苦しみがあなたには見えるのか / 土井健司…… 1

○ 2024 年復興・減災フォーラム
故郷喪失と再生 ―風土と人間の復興にむけて…… 2

○所長対談『復興のカタチ』
山中茂樹×山 泰幸 …… 3

○報告
叢書刊行を記念し、関東大震災 100 年フォーラムを開催 / 山中茂樹…… 4

○国際セミナー報告
第 1 回 日韓災害研究セミナー「災害復興と Slow Disaster」と現地視察 / 羅 貞一 …… 5

○報告
関東地震の災害遺構 ―慰霊・追悼と記憶の継承 / 山 泰幸
南海トラフ地震対策に関する地域の取り組み / 照本清峰…… 6

○観感学楽
IDRiM Conference2023 に参加して / 岡田憲夫
済州島の海女と Well-being ―高齢者の生きがいと仕事 / 金 慧英 …… 7

○復興しらべがき
日本災害復興学会　会員募集中 !!… 8

どうすれば貧者の苦しみがあなたには見えるのか

副学長・神学部教授
土 井 健 司

368年の春、カッパドキアは大きな不安につつまれていた。今日トルコにあるカッパドキアは、その昔ローマ帝国の属州であり、州都はカイサリアにあった。このカイサリア教会の主教を補佐していたのは、バシレイオスという名の背は低いが、眼光は鋭く、力に満ちた人物であった。前年の367年から冬に雨も雪も降らず、旱魃のため穀物が成長するかどうか、翌年の春になると人びとは不安でいっぱいであった。不幸にもこの不安は的中し、その年の秋までに植えた苗は壊滅し、農民たちは途方に暮れ、子どもを売ることまでして税を払い、糊口をしのぐしかなかった。それでも食べるものが乏しくなっていき、とうとう底をついた家も多数みられるようになったという。

こうした時にカイサリアの教会で説教を行ったのがバシレイオスであった。この時期のものとして二編の説教が伝わっている。第六講話「わたしの倉庫を壊す」と第八講話「旱魃と飢饉」とである。これらのなかでバシレイオスは何を語っているのか。第一に、飢饉というものは人災だということ。飢饉というと自然災害と思われがちだがそうではない、とバシレイオスは言う。人類は作物を貯蔵する技術をもち、穀物を倉庫に蓄えるようになっている。そのため一年や二年穀物が実らなくとも人びとが食べていけるだけのものは貯蔵されている。そこで飢饉というものは貯め込んだ穀物を放出しない富者の貪欲が引き起こしているのであって、人災なのだという。講話のタイトル「わたしの倉庫を壊す」は、壊して穀物を放出しようというのではなく、反対に壊して新しくもっと大きな倉庫を建てようという富者の貪欲を述べたものとなっている。そこでバシレイオスは倉庫をひらくように富者に勧告する。貴族の出であったバシレイオスは、この時に私財を投げて大量の穀物を購入して飢餓者に無償で提供したという。

もう一つバシレイオスが述べるのが、餓死しようとする人の横を通り過ぎてはならない、無視してはならないということ。飢饉のときに最も恐ろしいことは、餓死者の現実に加えて「愛の飢饉」（リモス・アガペース）だという。そこで「どうすれば貧者の苦しみがあなたには見えるのか」と述べ、バシレイオスはできるだけ手を差し伸べるように勧める。すなわちフィランスロピアを勧める。フィランスロピア、「人間愛」とは、災害や病気のため人間扱いされない人びとを「人間」として関心をもち愛すること、かかわっていくことをいう。翌年になると飢饉が終息し、さらに371年になるとバシレイオスはカイサリアの主教となってカイサリア近郊に病院を建てる。そこでは人間と見なされていなかったハンセン病の病者を彼はケアしていくことになる。

飢饉、病気、災害などいかなる状況にあっても人が人として扱われること、バシレイオスはこれを語り、また実践した人であったという。復興研の理念はこうした故事にもつながっているものと思われる。

関西学院大学災害復興制度研究所　日程：2024年1月7(日)～8日(月)

2024年復興・減災フォーラム

故郷喪失と再生 ―風土と人間の復興にむけて

会場＆オンラインのハイブリッド開催

大規模な自然災害や人為的災害による故郷の喪失は、生活環境やコミュニティを破壊し、被災者や避難者の心に深い傷を与える。失われた故郷の再生には、生活再建のみならず、歴史的・文化的背景を背負った生活環境やコミュニティ及び、それらを基盤とする地域のアイデンティティの回復、あるいは新たなかたちでの再創造を含む、「風土」の復興が求められる。故郷の再生、風土の復興なくして、真の意味での人間の復興は成し得ないだろう。本フォーラムでは、「故郷喪失と再生」をテーマに、「風土と人間の復興」にむけて、議論を深めたい。

1/7 Sunday

関西学院会館　レセプションホール
兵庫県西宮市上ケ原一番町1-155
13:00～17:30

◆全国被災地交流集会「円卓カフェ」

故郷喪失と再生、風土と人間の復興を語り合う

所長の山泰幸が長年地域で実践をしてきた「哲学カフェ」の形態で「円卓カフェ」として実施予定。「哲学カフェ」とは、フランスのパリが発祥の地で、毎週日曜日の午前喫茶店に自由に人々が集まってコーヒーを飲みながら、自由にいろいろなテーマで議論をする場のことで、現在、日本各地で開催されている。今回は、「故郷喪失と復興」をテーマに、哲学カフェ方式で、新たなかたちでの「風土と人間の復興」について語り合うことにしたい。

【第１部】研究者が「復興」に関わるとは

【第２部】被災者・支援者にとっての「復興」

【第３部】全体討論会

司会・山　泰幸（関西学院大学災害復興制度研究所所長・人間福祉学部教授）

1/8 Monday

関西学院会館　レセプションホール
兵庫県西宮市上ケ原一番町1-155
13:00～17:00

◆シンポジウム

故郷喪失と再生－風土と人間の復興にむけて

〈敬称略〉

◉特別座談会　ウクライナの故郷喪失と再生

◉特別講演＆映画上映　『あいまいな喪失』
山田 徹（映画監督）

◉講演＆パネルディスカッション　故郷喪失と再生―風土と人間の復興にむけて

《パネリスト》
山　泰幸（関西学院大学災害復興制度研究所所長）
張　政遠（東京大学総合文化研究科准教授）
青木　勝（㈱山古志アルパカ村代表取締役）
かん澤沙織（福島避難母子の会 in 関東）

《コーディネーター》
岡田憲夫（関西学院大学災害復興制度研究所顧問）

【主催】関西学院大学災害復興制度研究所
【共催】日本災害復興学会　【後援】朝日新聞社

interview

所長対談
『復興のカタチ』

語り手：山中茂樹氏　聞き手：山 泰幸所長
（関西学院大学災害復興制度研究所顧問）

山　災害復興という分野に携わられるようになったきっかけから、お話いただけますでしょうか。

山中　きっかけといえば 1995 年の阪神・淡路大震災です。その頃、僕は朝日新聞神戸総局のデスクをしておりました。当時は、東海地震が起こるだろうと言われていて、それはある程度予知できると言われていたんです。判定会議が始まったらいよいよ地震だと言われていたところに、いきなり関西ですよね。関西では 40 年ほど、死者が出るような地震が起きていなかった。だから、そんな大きな地震が起こるなんて夢にも思っていなかった。それもあって、僕らもお恥ずかしながら、地震の勉強はほとんどしていなかったんです。そこへ、あれだけの地震が起こった。だから、僕らの震災報道というのも瓦礫の中から始まりました。それ故、むしろ「復興」とか「被災者支援」という方に目が行った。そういったところから報道が始まったときに、この国には復興に関する制度が殆どないのだと、途中で気付いてくるわけです。これはどういうことだ、と。この災害大国で「自助努力、自己責任」というような世界はありえないのではないか、そんなふうに思い始めました。そこから、復興というものに関心が向いていったんです。

山　災害復興制度研究所には「制度」という言葉がついていますよね。よく訊かれますが、やはり当初から法制度の整備や研究が中心だったのでしょうか。

山中　最初は、5 年間で終わる予定のプロジェクト型研究所だったんです。そこへ僕が「復興基本法」をつくろうという話を持ち込んで、それが叶ったら解散、という計画だったので「制度」がついたわけです。

山　なるほど。「災害復興基本法案」を研究所から提案し、その後、「被災者総合支援法案」を提案しました。そういった形で法案の提案をすることが、研究所の中心的活動になってきたのでしょうか。

山中　そうですね。そもそも基本法というのは実務的ではない「マグナ・カルタ」みたいなもので、実際に動かすには、個別法とか実定法が要るわけです。そこで「被災者総合支援法」が必要だという話になって、それなら実務的なものをつくろうという流れで、順々に来ていますね。本当はそこから他の法律や社会システム、それを裏付ける理念というのも全部必要にはなるんですが、中々手が回らないので一つずつ潰していくことをやってきました。

山　先生は 10 年間当研究所の主任研究員として勤められ、その後は顧問として研究所の活動にアドバイスをいただいていますが、顧問になられてから現在まで、特に取り組まれている事などはございますか？

山中　「人間の復興」を思想体系として本にするということが、ひとつの大きな仕事ですね。僕は弟子を取っているような研究者ではないので、僕のやってきたことを本にして残し、伝えていかなくてはいけないと思っております。復興思想大系をある程度完成させたら、その先に「復興政治学」とか「復興思想史論」とかね。そういうものを新たな分野として作っていく必要があるのではないかなと。ただ、僕だけの力では無理なので、そういう人たちを探し、新たな世代を育てなくてはいけないな、と最近は思っています。

山　最後に、この研究所らしい研究を進めていくうえで、何かアドバイスをいただけますでしょうか。

山中　やはり「人」だと思います。どういうふうに我々の想いを、研究している・研究しようと思っている人たちに伝え、組織化していけるか。山先生と僕だけでは、とても全部やれないですよね。僕らにも、得意不得意があって。だから、どういう大きな絵を描いて、足らざる部分をどこからどういうふうに集めてくるか。それが、主任研究員の一つの大きな仕事だと思います。たぶん若い人たちの中にも、日本のパッチワークのような復興法制度・被災者支援制度の矛盾や足らざる部分に歯ぎしりしている人がいると思うので、そういう志のある若い人たちを如何にして我々の元に集め、一緒にやっていくかが必要です。だから、これからの僕の一番大きな仕事は、そういう若い人を見つけてくることなのかなと思っています。

山　本日は、貴重なお話をありがとうございました。

報告

叢書刊行を記念し、関東大震災100年フォーラムを開催

ゲストに井上元学長、西沢一橋大学名誉教授迎え

関西学院大学災害復興制度研究所顧問
山中茂樹

関東大震災100年を翌日に控えた8月31日、「人間復興の現在地は――災害多発時代、福田徳三の理念は生かされているか」をテーマに叢書『人間の復興』の刊行を記念するフォーラムを開催した。「人間の復興」とは、関東大震災の折、生存権擁護を第1に掲げた大正デモクラシーの旗手の一人にして福祉国家論の先駆者であった福田徳三の唱えた理念だ。阪神・淡路大震災から10年の2005年に発足した当研究所は、福田の思想を現代の災害復興に役立つ政策・制度として再構築しようとの考えからスタートしただけに、「人間の復興」が提唱されて100年の節目に復興研究の現在地を確認する意味も込めてフォーラムを企画した。

フォーラムには、福田徳三研究の権威ともいえるお二人をゲストとして、お招きした。お一人は、2012年3月に復刻版として刊行した福田の著作集『復興經濟の原理及若干問題』(関西学院大学出版会）で、ともに筆を執ってくださった関西学院大学の元学長、井上琢智先生、もうお一人は、一橋大学の名誉教授で、同大学経済研究所所長や福田徳三研究会代表を務められた西沢保先生。西沢先生はオンラインで参加された。研究所の山泰幸所長の挨拶、山中のフォーラム開催の趣旨説明のあと、西沢先生による「福田徳三と人間復興の経済思想」と題した基調講演があった。

これによると、福田は東京神田の生まれで、12歳のときに洗礼を受けたプロテスタント。東京高等商業学校（現・一橋大学）を卒業後、ドイツに留学。帰国後、東京高等商業学校教授（経済原論、経済史担当）や慶応義塾大学教授を務めた。吉野作造とともに黎明会を組織し、民本主義の啓蒙に努め、57歳で亡くなるまでに21巻に及ぶ膨大な著作を残した。

地震の発生時、福田は箱根に滞在しており、全面的に書き直した『流通経済講話』の改訂作業に没頭していたが、地震から3日目、箱根を出て、徒歩と露営で、惨状が続く東京に入った。福田は9月10日から東京商大の学生ら延べ65人を率い、「自らゲートルを巻き草鞋履き」で、集団バラックに避難している罹災者3万7000人を対象に職業調査・失業調査にあたった。この実地活動から、失業者は11万人を超え、扶養家族も含めると30万人もの罹災者が強制的惰民、不本意的惰民を強いられており、これは技能、適性、熟練など無形の財物の損失となる。いたずらに「形式復興、建築復興、入れ物の復興（総評すれば風袋復興)」ばかりに血道をあげていると帝都復興院総裁、後藤新平を批判し、肝腎要の働くべき人間の復興をなおざりにすることは許されないとして、生活、営業および労働機会―これを総称して営生の機会という―の復興を急げと提唱した。しかるに大地主たちは借地権のことばかり申し立てるが、居住権は建物の焼失とともに焼け去るものではないとして、「私法一部の適用を停止すべき（モラトリアム)」と主張、生存権擁護令の発布を求めた。「国家は生存する人より成る。焼溺餓死者の累々たる死屍からは成立せぬ。人民生存せざれば国家亦生きず。国家最高の必要は生存者の生存擁護これである」と謳い上げ、「真の復興者は罹災者自らを措いて他になく」、自ら生きんとする強い衝動、「慈善によらず、救護に頼らず、自らの働きをもって生きて行かんとする堅い決意をもっている人が復興の最根本動力」と罹災者の奮起を促した。

▲対論で、福田徳三の理念の真髄や現代にどう生かすかについて話し合う井上琢智元学長（左）と顧問の山中茂樹。

▶オンラインで時折、一橋大学名誉教授の西沢保先生も議論に加わった。

このあと、井上元学長と山中の対論に時折、西沢名誉教授がオンラインで加わり、福田の理念が戦後、災害弔慰金法や被災者生活再建支援法として結実した経緯などをたどりながら、被災者の再起は「自力再建」「自助努力」としてきた政府や一部学界の厚い壁に挑んだ政治家や官僚、研究者、復興リーダーらの闘いの道筋をたどった。とりわけ、井上先生からは、ドイツで医学を学んだ後藤新平の生涯の思想は「生を衛（まもる）」つまり「衛生」だと指摘されている。その「生」とは「黒死病・コレラなどの伝染病などから人を衛（まも）る」ことであり、その点で建築物・道路の整備が第一義となったのではないか。対して、福田は「生を厚くする」、つまり「厚生」は、人が実際に生きていく基本としての「営生」（生活と営業）を第一義としたのである。本来なら「厚生」→「衛生」（「人」→「物」）の順であるべきなのだが、それが逆転したのが関東大震災の帝都復興であったとの指摘があった。

国際セミナー報告

第1回 日韓災害研究セミナー
「災害復興と Slow Disaster」と現地視察

日時：2023 年 7 月 21 日（金）～ 22 日（土）
会場：釜山大学、韓国原発地域（釜山広域市等）

関西学院大学災害復興制度研究所 主任研究員
羅 貞 一

関西学院大学災害復興制度研究所では、毎年の研究活動として学術的意見交換を中心とする「研究会」と現地調査など調査研究活動を伴う「共同研究」を行っている。今回は、その中で今年の共同研究（指定研究）の一つである「原発災害復興の国際比較分析に関する調査研究」の活動報告を行う。2023年7月21（金）～7月22日（土）に釜山大学にて釜山大学Living with Slow Disaster研究チームと共に第１回日韓災害研究セミナー「災害復興とSlow Disaster」と釜山・蔚山の原発地域での現地調査を含む合同研究会を行った。

第１回日韓災害研究セミナー「災害復興とSlow Disaster」では、本研究所を代表して、山泰幸所長から歓迎の挨拶と合同研究会の趣旨説明がなされた。その後、Slow Disaster研究代表である釜山大学の周鈗涎助教授から「Slow Disaster研究の紹介」と題して、Slow Disaster研究が対象にしている災難（災害）を一つのイベントではなく、プロセスとしての災害の概念から被災者・被害者中心の記録と国内外でのフィールド研究活動などが報告された。続いて、本研究所の羅貞一主任研究員・准教授は「関西学院大学災害復興制度研究所の役割と活動」と題して、本研究所の「人間の復興」の理念及び活動とSlow Disasterとの関係について述べた。また、東京大学農学生命科学研究科の溝口勝教授からは「福島から始まる日本の復興農学」と題して、2011年東日本大震災の後に地域復興のために研究者が福島に足を運び、専門知を駆使した試みとして「復興知」の事例でもある福島県飯舘村の現場課題やそこで開発した最新の農業技術の活動などが紹介された。つづいて、東京大学アイソトープ総合センターの秋光信佳教授から、「原子力災害復興支援からの学び～支援から協働へ～」と題して、原子力災害におけるコミュニティ崩壊と文化喪失に対して、地域復興の手伝いをするため、大学の知識や技術が、どのように地域に展開できるかを話した。次は、東京大学東アジア藝文書院長である石井剛教授から、「忘却された記憶について記憶すること」と題して、災害後の心的外傷後ストレス障害（PTSD）、心的外傷後ストレス反応（PTSR）とそのケアについて語った。最後に、本研究所の山泰幸所長は「災害遺構と防災リテラシーの向上一大正の地震・火山噴火の記憶の継承」と題して、火山噴火の軽石や火山灰によって大半部が埋め尽くされ、鳥居の上部だけが地面に見える状態になっている腹五社神社を取り上げ、災害遺構の重要性を語った。その他、指定研究のメンバーでのある横浜国立大学リスク共生社会創造センターの具本埈助教、韓国・西京大学の柳靜教授など、約20名が参加し、災害復興とSlow Disaster について活発な質疑応答・議論が行われた。

▲第 1 回日韓災害研究セミナー「災害復興と Slow Disaster」

7月22日（土）の釜山・蔚山の原発地域の現地視察は、釜山大学Living with Slow Disaster研究チームのチョン・スヒ研究員、写真家チャン・ヨンシク氏の案内と、羅貞一主任研究員の通訳により行われた。古里原子力發電所は1978年から運転を開始した韓国初の商用原子力発電所で、現在も７基の原子炉が稼働しており、また４基も建設中である。古里原發と数百メートルしか離れていない地域コミュニティを訪問し、1969年に起きた集団移住による生活被害と地域文化の喪失について説明を聞いた。特に、集団移住で構成された温井村（オンジョンマウル）の住民代表キム・ヨンギョングァン氏の証言によるその当時の移住者の生活と生業再建の苦労は想像を超えたものだった。日韓の参加者に原発災害復興における人間と地域コミュニティの復興について、改めて考える機会となった。

▲７基の原子炉が稼働している古里原子力發電所（韓国）

報告

関東地震の災害遺構
―慰霊・追悼と記憶の継承

関西学院大学災害復興制度研究所所長
山　泰幸

近い将来、発生が予測されている首都直下型地震にいかに備えるかが喫緊の課題となっている。しかし、大正の関東地震（1923）から100年が経過し、直接経験した者でなければ、実感をもってイメージすることは難しい。そこで注目されるのが、過去の被災状況を今に伝える災害遺構である。

災害遺構には、被災した建造物・構造物等を保存し、教訓を未来に伝えようとする、震災遺構がまず思い浮かぶ。特に、東日本大震災（2011）以降は、被災状況をリアルに伝える震災遺構が各地で保存されるようになっている。

一方、多くの犠牲者を出した大規模災害にあっては、慰霊・追悼を目的とした石碑が建立されることが多い。特に、関東地震で大きな被害を受けた南関東地域では、犠牲者の慰霊碑・追悼碑、供養塔などが数多く建立されている。これらは犠牲者を慰霊・追悼する宗教的役割を果たしており、慰霊祭・追悼式などの行事をともなうことが多い。都立横網町公園にある東京都慰霊堂は、関東地震で最も被害の大きかった被服廠跡に、犠牲者の遺骨を納めて建てられたのが始まりで、代表的な慰霊施設といえる。公園内には、ミュージアム機能を備えた東京都復興記念館があり、震災の記憶を伝えている。

関東地震から100年目の2023年9月1日、筆者は東京都慰霊堂を訪れる機会を得た。参拝者が多く訪れるなか、そばにある朝鮮人犠牲者追悼碑の前では追悼式が行われており、韓国伝統舞踊の追悼舞が印象的であった。翌9月2日、東京都墨田区八広の荒川堤防下にある「関東大震災時　韓国・朝鮮人殉難者追悼之碑」を訪れた。荒川河川敷では、流言を信じた日本人によって虐殺された朝鮮人の追悼式が行われていた。ここでも印象深かったのは、韓国伝統芸能であるサムルノリによる踊りと演奏であった。

▲荒川河川敷のサムルノリの様子

虐殺事件による死は、地震による直接死や火災による死とは異なる。加害者によって、無念の死を遂げた犠牲者がいる。だからこそ、犠牲者の魂を慰撫し、参列者の心に強く訴える伝統芸能が求められる。記憶の継承における儀礼の力を再認識することになった。

南海トラフ地震対策に関する地域の取り組み

関西学院大学建築学部教授
照本清峰

南海トラフ地震のリスクに対する防災・減災対策と事前復興の取り組みは、太平洋沿岸一帯を中心として各地域で進められている。筆者が2012年から携わらせていただいている和歌山県印南町切目地域でも、南海トラフ地震による地震動及び津波浸水による被害の危険性は大きく、対策を推進することは重要な課題になっている。そのため、地域の人たち及び印南町役場の方々と協働して、地震防災対策を検討している。ここでの取り組みの大きなねらいとして、「南海トラフ地震などの大津波を引き起こす巨大地震が発生したときに、地域の中にいる人たち全員が確実に避難でき、誰もが過ごしやすい避難生活環境を築くための体制をつくること」と掲げている。筆者は、切目地域の特性と取り組みの推進の課題等について地域の人たちに教えていただきつつ、南海トラフ地震発生後の対応課題を設定し、それらの検討結果をもとに災害対応方策の枠組みを整理する役割を担当している。

2021年度からは、「災害発生後の孤立時期と生活環境の整備段階の対応方策の検討」という課題を設定し、震災発生初期の情報伝達、医療面の対応、避難生活と地区間の連携のあり方等について枠組みを整理している。これまでの議論として、切目地域全体としての対応拠点を設定するよりも地域内の各地区に避難生活拠点を設定して地区間で連携すること、各地区での生活拠点のあり方と地区間での連携内容等が示されている。また、医薬品と物資の搬送について地区間の連携の枠組みを整理するとともに、新たな方法として、ドローンによる搬送の内容を模索しているところである。

検討結果を踏まえ、今年度の切目地域の対応訓練では、これまでの津波避難訓練に加えて、ドローンによる医薬品搬送と物資搬送の訓練を実施する。ここでは、搬送訓練を通じて、地区から役場への情報伝達、ドローンによる搬送箇所の設定、ドローン搬送の受け取り等について確認することになる。これらの結果をもとに、切目地域独自の避難生活環境に関する対応マニュアル案をとりまとめていく予定である。

◀ワークショップの様子

観 感
学 楽
かんかんがくがく

被災地を観る、
被災地の痛みを感じる、
そして、
被災地から学ぶ、
被災地の人たちと楽しむ。

被災地ネット

IDRiM Conference2023 に参加して / 岡田憲夫
済州島の海女と Well-being/ 金慧英

IDRiM Conference2023 に参加して

関西学院大学災害復興制度研究所顧問
岡　田　憲　夫

2023年9月28日から30日の三日間にわたって、インドのウッタラーカンド（Uttarakhand）州のルールキー（Roorkee）市にあるインド工科大学ルールキー校（IIT ルールキー）で開催されたIDRiM Conference 2023に参加してきた。ウッタラーカンド州は、インドの北部にあり、ヒマラヤ山脈の南麓に立地している。大自然に恵まれるとともに、古くから人々が住んでいてアショカ様式の古い仏教の遺跡とともに、ヒンズー教の宗教施設も多くある。IITルールキーはインドでも最も古い工科系の大学として国際的にも知られている。

ここでIDRiM Conference（国際総合防災学会）について少し説明しておきたい。本学会はそもそもどのようにして生まれたのか？ 今世紀に入った直後（2001年）のことである。「総合防災学」を世界に広めていくために、当時京都大学にいた私や仲間がオーストリアの国際研究所（IIASA）を訪問し、リスク研究部門のAniello Amendola博士、Joanne Bayer博士に働きかけで始めたのが最初。毎年主催地を変えながら国際学会にもなり約四半世紀が過ぎた。

今回の会議は現地開催を基本にしつつ、オンライン参加も認めるハイブリッド形式で実施された。現地参加者は160名程度、全参加者の70%（外国からの参加者はその25%）であった。会議は概略、一日目から三日目まで、朝の9時から晩の8時頃までの時間帯で熱心に発表と議論が行われた。Plenary session, parallel sessionのほかに、シニアの研究者が加わって若い研究者を督励・激励するためのYoung Scientist Session（これは本学会の当初からのポリシーとして継続している）などが組み合わされてプログラムが出来ている。

◀筆者も開催校の責任者から暖かい歓迎を受けました。

実はインドと周辺地域の気候変動や地震災害が多発している。このことを受けて現地主催者のルールキー工科大学が、インドや国際機関の専門家も巻き込んだパネルディスカッションで現状報告と新しい取り組みが紹介された。

なお山泰幸所長（Zoom参加）と私がリーダシップを取って企画した特別Zoom sessionでは地域復興まちづくりを斬新な切り口で取り上げた。実践例を交えて、工学・理学だけではなく、人間学や社会科学などにもまたがった多様なsciencesの対話の方法と場所づくりがいま切実に求められていることを訴えた。実は本会議の一つのテーマが「いろいろなsciencesをいかに有効に統合した総合防災アプローチを工夫していくのか？」であった。この意味で私たちのセッションはまさにそこに一石を投じたものと確信している。

済州島の海女と Well-being
――高齢者の生きがいと仕事

法政大学現代福祉学部 専任講師
金　慧　英

韓国の済州島には、3,437名の海女が登録をしている。2016年にはユネスコ人類無形文化遺産に登録され、生きている文化遺産として済州島の象徴として存在している。海女の91.2%は60歳以上であり、70歳以上の方も62.4%を占めている（統計庁、2023）。新しく海女になる若い女性が増えないなか、海女の高齢化が進み、継承には課題があるが、高齢者になっても生き生きと現役で働いている海女の様子は、Well-beingで幸福な高齢者の姿そのものであるといえる。

◀海女の休憩の様子

現役で働いている海女の73.7%は、「80歳になっても引退する意向がない」と考えており、主な理由は「健康が許す限り仕事がしたい/仕事が楽しいから（80.6%）」である（湖南地方統計庁、2020）。経済的理由よりも、働くこと自体に生きがいを感じている人が多いようである。

2023年2月に済州島に現地調査に訪れた。済州島の朝天里にある海女会館の海女も平均年齢75歳以上であり、80歳以上の方もいた。海女会館にて、高齢海女の日常生活について、お話を伺うことができた。金氏（女性・84歳）は、10代から海に潜って生活をしており、70年近くも海女として生きたという。健康の秘訣について尋ねると、特別なことはしておらず、海に潜ること、そして仲間と一緒に時間を過ごすことだけであるとのことだった。有償労働を通して社会貢献や社会参加をすることや、頻繁に仲間に会いコミュニケーションを取ることは、高齢者の生きがいに影響を与える重要な条件とされているが、海女の生活はこうした条件がよく整っていることがわかる。

超高齢社会を迎え、高齢者が健康で生き生きとした生活を送ることは日韓ともに共通の課題となっている。生産的な活動を継続し、自立して生活をする済州島の海女の姿は、高齢者の生きがいと仕事の関係や、Well-beingを実現するうえでの大きなヒントになるだろう。

（韓国）統計庁ホームページ（2023）「海女現況」
（韓国）湖南地方統計庁（2020）『済州特別自治島：魚家実態調査』

復興しらべがき
復興調書

私のセンダ・コレヤという芸名の由来である（千駄ヶ谷をとって“千田”朝鮮人つまりコーリアンをもじって“是也”というわけである）千駄ヶ谷で朝鮮人に間違えられて殺されそうになった事件の起きたのは、大震災の二日目の晩だったとおぼえている。　千田是也

千田是也は、本名伊藤圀夫。1944年、東野英治郎や小沢栄太郎らと俳優座を創立し、1994年に90歳で亡くなるまで同座代表を務めた演出家であり、俳優である。

1971年の雑誌『潮』9月号「日本人100人の証言と告白」に掲載された千田の証言によると、関東大震災が起きて二日目の夜、担架や荷車に乗せた負傷者たちの行列が続く状況のなかで聞くと、朝鮮人が日ごろの恨みで大挙して日本人を襲撃しているとか、無政府主義者や社会主義者が井戸に毒を投げ込んだり、通り端で避難民に毒まんじゅうを配ったりしているとかいうバカバカしいデマが、いかにもほんとうらしく思えてくる。また、別な方面からの情報によれば、軍は目下、多摩川べりに散開して神奈川方面から北上中の強力な不逞鮮人集団と交戦中だという。

そこで勇みたち、登山ヅエを持って家の前の警備についていたが、何も起きないのにしびれを切らし、敵情視察のつもりで、千駄ヶ谷の駅近くに出かけて行ったところ、不審人物と間違われたのだ。棍棒だの木剣だの竹ヤリだのマキ割りだのを持った連中に「ちくしょう白状しろ」「ふてえ野郎だ、国籍をいえ」と小突き回され、「いえ日本人です。そのすぐ先に住んでいるイトウ・クニオです。このとおり早稲田の学生です」と学生証を見せても、信じてもらえず、マキ割りを私の頭の上に振りかざしながら「アイウエオ」をいってみろだの「教育勅語」を暗誦しろだのという。まあ、この二つはどうやら及第したが、歴代天皇の名をいえというのには弱ったところへ近所の酒屋の若い衆が「なぁんだ、伊藤さんのお坊っちゃんじゃねぇか」と割って入ってくれて九死に一生を得たというのだ。

そして「あの朝鮮人騒ぎではずいぶんたくさんの何の罪もない朝鮮人が殺された。朝鮮人に似ているというだけで――もともと大した区別はないのだから、その場の行きがかりで、ただ朝鮮人と思い込まれたというだけで多くの日本人が殺されたり、負傷したりした。（中略）私自身も自警団のマネをして加害者たらんとした気持ちを動かしたのである。このときの経験から、朝鮮問題はあちらの立ち場からの把握、理解をすることがいかに大切であるか、つくづくと思い知った」と反省し、センダコレヤと名乗ることにしたというのだ。

ところが、関東大震災100年を2日後に控えた8月30日の記者会見で、松野官房長官が「政府として調査した限り、事実関係を把握することのできる記録が見当たらない」と述べたそうだ。これに対し、東北学院大学の郭基煥教授は、1925年に発刊された警視庁の『大正大震火災誌』第6章第4節「自警団の殺傷事犯操作検挙」などに不十分ながら朝鮮人虐殺について言及したくだりがある、と指摘する。

関東大震災から1世紀も経って、朝鮮人虐殺はなかったとする歴史修正主義者の団体まで現れ、事実をねじ曲げて、ことさら「美しい日本」を演出しようとするのには唖然とさせられる。昨年、国際子ども平和賞を受賞した大阪のインターナショナルスクールに通う14歳の少女は「みんなが理想とするかっこいい日本になってくれるのを、ずっと待っています」とスピーチした。今こそ「美しい日本」より「尊敬される日本」をめざそうではないか。　（山中茂樹）

日本災害復興学会　会員募集中!!

入会をご希望される方は、日本災害復興学会のHP（https://www.f-gakkai.net/）より「入会申込書」をダウンロードのうえ、下記の事務局まで郵送にてお申込ください。

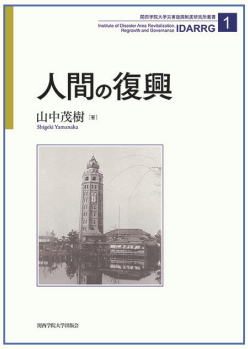
（1）申込書送付先
〒662−8501　兵庫県西宮市上ケ原一番町1−155
関西学院大学災害復興制度研究所内
日本災害復興学会事務局 TEL：0798−54−6996

（2）入　会　金　3,000円

（3）学　会　費（年額）
1）正 会 員　7,000円　　3）購読会員　6,000円
2）学生会員　3,000円　　4）賛助会員　一口：50,000円

News & Topics

◎叢書第1編『人間の復興』を刊行



人間の復興
関西学院大学
災害復興制度研究所叢書 1
判型：A5判 上製
頁数：312頁
著者：山中茂樹
価格：5,060円（本体4,600円）
発行：関西学院大学出版会

関東大震災100年の9月1日に、関西学院大学災害復興制度研究所叢書第1編『人間の復興』が関西学院大学出版会から刊行されました。
「復興の理念」「復興の相克」「復興の相反」「復興の主権」の4章から成る。個人的価値を超越した社会的価値の最大化に重点を置く為政者の「復興方針」は、時に被災者を置き去りにする。被災者こそ復興の主体であり、復興政策の最高・最終の決定権者となる仕組みを探る。
著者は、研究所の初代主任研究員で顧問の山中茂樹。

◉通常の「研究書」ではなく、「闘いの書」にふさわしい骨太の主張と力強い論述に圧倒されました。
（元研究所所長・法学部名誉教授、長岡 徹）

◉本書は（中略）福田徳三の「人間の復興」を主軸に据えての「復興」に係わる理論的整理や事例紹介、さらには政策提言や制度設計に至る、（中略）優れて実践的な学術的研究の成果として受け止めさせていただきました。
（福島大学名誉教授、山川充夫）

※お求めは全国の書店またはWEB書店にてお取り寄せください。

◎釜山大学Living with Slow Disaster Teamと第1回日韓災害研究セミナーを開催

7月21日に釜山大学Living with Slow Disaster Teamの関係者20名と、第1回日韓災害研究セミナー「災害復興とSlow Disaster」を開催しました。

研究所公式
YouTube
『復興のカタチ』

研究所公式
Facebook
アカウントを新設しました

関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY
災害復興制度研究所

〒662-8501　兵庫県西宮市上ケ原一番町1番155号
TEL:0798-54-6996　FAX:0798-54-6997
https://www.kwansei.ac.jp/fukkou
E-mail:fukkou-entry@kwansei.ac.jp

2023年11月発行